
ハイボールに沈む月

コウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイボールに沈む月

【Nコード】

N0535B

【作者名】

コウ

【あらすじ】

もうすぐ15歳の誕生日を迎える真琴は、親でありながら何もしてくれない母親に苛立ちを覚え、関係が上手く取れないでいた。そんな時、クラスメートから人生には決まった呼吸数があることを教えられ、人間が生きながらにして死へと確実に近づいていく事を知る。

ハイボールに沈む月〜第一幕〜

〜第一幕〜

人生をつまらなく生きる奴は醤油を飲みながら死を待てばいい。

出て行ったパパの時計をいつまでも腕にしているママを見ると、時々そう思う。

煙草を吹かす姿も何処となく愛想がなくて。

学校が8時半から始まる私の存在を知ってか知らずか、7時40分になっても50分になってもママがキッチンに立つ事はない。

その横顔に張り付いたパパの面影に嫉妬する。

半年前から一緒に住み始めた、自称しずくの彼氏のゴンちゃんが私の世話係となった。

ゴンちゃんの作ってくれるスクランブルエッグは最高に美味い。

昔、レストランで見習いコックをやっていたらしい。

トロトロと艶めく半熟の卵。

ももごと卵を口に押し込みながらもママの一喜一憂からは目が離せない。

ママの黒い瞳、筋の通った鼻、くわえ煙草が癖になってしまった唇。どれもこれも、ママではあるが「ママ」ではない。

少し、複雑……。

「学校、今日も遅刻だね。」

ゴンちゃん言葉に時計を見上げた。

7時57分。

トーストもろくに食べていないのに学校へ行くなんて、気が乗らない。

むしゃむしゃと自分のペースに合わせて口を動かす。

その動作すらくだらなく思えて、自分の人生がつまらない塊のような気さえしてくる。

だけど、くだらなくも留まることを知らない我が人生の為に、ここ

そ必死で時間稼ぎをしなければ。

「今日、学校で体育の授業があるの。」

それを受ければ何日分の呼吸数が減るのかなあ。」

この質問をするのには、「人間の一生には決まった呼吸数がある」と同じクラスの高橋豊が言っていたことが原因だ。

高橋豊は学年でもけっこう頭がいいほうだから、その話を聞いた私を含めクラスの大半が彼の言葉を信じて疑わなかった。

息を吸ったり吐いたりする事に躊躇し始め、毎日の呼吸数を数え始める奴までいたほどだ。

だって、もしもあと1回しか息ができないとしたら・・・

そこには大人でさえも知らない死の世界が待っている。

それを思うだけで背筋がぞつとした。

生き物ってのはなんて残酷なんだろうか。

生れ落ちてからすぐに死へのカウントダウンが始まるんだ。

1秒、1分、1時間・・・。

死ぬ為に生きているようなもんだ。

右手で持ったフォークを皿にコツコツ当てながら、背を向け食器を洗っているゴンちゃんへの質問を考える。

「ねえ、ゴンちゃんは昨日までに何回息したの?？」

カラオケ店でアルバイトを始めた夜勤明けのゴンちゃんの目は、寝不足で腫れぼったくていつもより1回り小さく感じた。

小さな細い目がアタシを睨む。

「数えたことないからわかんないよ。」

そんな事言っていないでさっさと食べちゃいなよ。

また先生から電話がきちゃうだろ。」

排水溝へと流れる水の音と共にゴンちゃんの声が消えていく。

その間も私の頭の中にある質問は複雑に絡み合って、解けることなく口へと運ばれる。

「そう言えば今日、体育で持久走するって言ってた。

グラウンドを何週も走らされたりしたら、きっと私死んじゃうよ?」

たくさん呼吸もしなきゃならないし、走りながら息を数えるのだから難しいしさ。

今まで数えてきた記録がパーになっちゃうかも。」

ゴンちゃんは首だけをこちらに向けて時計を目で追った。

8時5分。

「8時過ぎてるよ。早く準備しなよ。俺、今日は夜勤明けで・・・」
ゴンちゃんの言葉をママの声が唐突に遮る。

「行きたくないなら、行かなくていいわよ。電話しとくわ。」

ママの虚ろな瞳にはテレビ画面の映像だけが移っているようだった。さつきと同じ姿勢のまま横顔がそこにある。

最近、ママは私の顔を見ようとしなない。

私は味気ないぶよぶよとした白身の部分をぶすりとフォークで突き刺した。

白身は嫌いだって前に言ったのに・・・。

昨晚の洗い物を忙しく片付ける大きな背中思い切り中指を立てた。私の中指が立つのと同時に水道の元栓が締まり、おっ立てた中指を引っ込めるタイミングを失った。

中指を突き立てる私の姿と極限に眠そうなゴンちゃんの目がリンクする。

「はは・・・マジくたばりそうだよ。おやすみ。」

几帳面にタオルで水滴を拭き取りながら、私の頭をポンポンと撫でリビングから出て行った。

静けさの増したリビングにコマーシャルの陽気な音楽が響く。

「・・・学校、電話しないでもいいから。」

変に間の空いた私の声にうなずくように、ママは煙草の煙を吐き出しウイスキーの入ったグラスに手を伸ばした。

ハイボールに沈む月〜第二幕〜

もともと、私達家族は4人だった。

けれど、私の12回目の誕生日を迎えた7月に、ケーキを買いに行くと言ったときパパが姿を消し行方知れずとなった。

その日、パパがケーキを買いに行くと言って出て行ったのにも関わらず、ママは冷蔵庫にケーキを準備していて、パパの帰りを待つことなくさやかな私の誕生日会は開催された。

パパの居ない誕生日会は不思議なほどに至って普通で、結局私は「どうしてパパは帰って来ないの？」という質問をする機会を永遠に失ってしまった。

12本並べた蠟燭を一気に吹き消して目を瞑る。

あの日、パパが行方をくらますことをママは前々から知っていたんじゃないかと思う時がある。

ママの買ってきたケーキの味は覚えていないけど時折、指先を見つけているとひんやりと冷たい生クリームの感触が蘇ってくる。

私のささやかな誕生日会から2ヵ月後の九月に突然パパは姿を現した。見たことも無い女の腕に自身の腕を絡ませながら。

私の生涯と昨日までの小遣いをかけて言えるが、あの日のことは決して忘れない。

その瞬間、世界中のパパと区分される人間が、所詮は一人の「男」であることを知った。

パパの連れてきた娼婦のような格好の女は、「手切れ金」とやらをママに叩きつけ、高笑いをしながら酒臭そうな息を吐いた。

女が紙幣を叩きつけた瞬間、紙であるはずの紙幣が瞬間的に刃物と化し、ママの頬をスパッと切りつけた。

斜めに切れた傷口からゆったりと血が垂れる。

それはまるで、ビデオのスローモーションのように滑らかで繊細で、そして何よりも鮮明な赤色をしていた。

魅力的でグロテスクな美しさに息が止まりかけた。

ママはいつも以上に冷静に淡々とした口調で二人に向かって喋っていた。

ママの言葉一つ一つが聞いてはいけない呪文のような気がして、私は両手で耳を覆い「あああああ」と奇声を発し音で音を掻き消した。

自分の声だけが耳の奥に異様に響く世界観の中で、目玉だけをぎよるぎよると動かす感覚に気味悪さを覚えた。

丁度その時、出かけ先からしずくが戻って来た。

相変わらずマイペースというか漂々としていて、鼻歌を歌いながら緊迫感漂う玄関をすり抜けてリビングへと向かっていく。

パパの視線は、しずくが3人の間をいとも簡単にすり抜けパパに背を向けるその時まで、ずっと追っていたのだけど、しずくの目には一切パパが映っていないようだった。

その時、パパが少しだけ寂しそうな顔をしていた事を私は今でも忘れられずにいる。

そして、耳を覆い奇声を発する私の指先をパパの大きな掌が包み込んだ感触も。

急に現実味のある声が耳の奥底まで響いてきて、目の前がクラクラした。

「真琴、ごめんな。」

2ヶ月ぶりに耳にする懐かしい音階。

鼻の奥が急に熱くなり、唇を噛み締めていないと今にも涙が零れ落ちそうだった。

きっと・・・、きっと。

私は、パパが大好きだったのだと思う。

パパと女が騒々しく出て行った玄関から、オレンジ色の光の筋が断ち切られた。

ドアが閉まると急に玄関が色を無くし、目の前に散乱する紙幣だけが妙な現実味を帯びていた。

薄暗い玄関で四方に落ちているお金を膝を付き広い集めるママの後姿が、私には情けなく思えて思わず目を伏せた。

散らばったお金を1枚残らず全て拾い集めると、ママは膝の砂埃を払いながら、

「今夜はあんた達が食べたいものをとるわ。」と微笑み、リビングへと歩いていく。

私は1人、玄関に取り残され涙で滲みはじめたドアノブを唇を噛み締めて見つめていた。

「ねえ、ねえ！マコちゃん、何食べたあーい？」

しずくの声にも振り向く事が出来ない。

昔、鉄棒から落ちて唇を切った時、その時の味がじわじわと口内に広がっていく。

頭の中でパパの言葉がエンドレスに再生される。

女が撒き散らしたお金でご飯を食べるなんてイヤ。

それ以上に嫌だったのは、いつもと変わらない2人の態度。パパがいてもいなくても同じ、そんなの嘘に決まってるー。

「ねえってばあー。マコちゃん何食べたいのう??」

背後からしずくの細い腕が急に私の鎖骨付近へと伸びてきて、私の涙で濡れた頬を拭った。

「大好きよ、泣き虫マコちゃん。チューしたげる」

小さい頃から、何かにつけてしずくはチューしたがるんだ。

後頭部にしずくの唇がぶつかった瞬間、ママの声がリビングから響いた。

「お寿司頼もうか？トロとかイクラとか、豪華なやつ。」

しずくの2度目の歓声と共に私も玄関に背を向けた。

パパはもう帰って来ないー。

その日、あれほど抵抗しておきながら、結局は寿司としずくが追加注文したピザを3人で美味しく食した。

ママとしずくは少しだけお酒を飲んで、私も少しだけお酒を飲んだ。お酒は美味しくなかったけど、頭がクラクラして今日一日の出来事

が全て夢なんじゃないかと思えて、笑いがこみ上げた。

そう、今日一日の出来事が全部夢ならば・・・。

どんなお金でも所詮はお金であることに変わりはなく、美味しいものはどんな時も美味しいことに変わりはない。

私達家族が4人から3人に変わり、男のいない生活が始まろうとしていた。

私は、12歳と2カ月だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0535b/>

ハイボールに沈む月

2011年1月15日02時52分発行